

人生は旅をすること

——ライフワークの環境に行き付く——

Voyages for 50 years toward Lifework Environmental Management

西嶋 洋一*

要約 国際プラントメーカー従業員として、また環境専攻の大学教員として併せて50年間の勤務経験を踏まえたと筆者の場合は「人生は旅をすること」と捉えることが出来ると思う。先人松尾芭蕉は奥の細道で「日々旅にして、旅を栖とす」と表現した。旅とは交通機関を使って移動することとは限らず、組織課題を究めていくことも、自らの興味のあることを深めていくことも、旅として捉える。国内では都道府県を全て出掛けた。世界50以上の国に仕事で旅する機会があり、ユネスコ世界遺産登録リストのうち60箇所に出掛けている。組織課題ではライフワークとなる地球環境に至るまでも営業・調達・ビジネスの多くの分野に及んだ。かつ旅には付きもの異文化交流を通じて、これらの旅を楽しみ、味わうことが出来たことが自分の人生であると思えるし、可能な限りこれからも続けていきたい。

キーワード 人生は旅をすること

第1章 「人生は旅をすること」 ライフワークの環境に行き付くまで

1) 奥の細道・日々旅にして旅を栖(すみか)とす

本書の主題は「私の人生旅紀行 - 世界遺産と地球環境を訪ねる -」とした。私は「人生は旅を

すること」といえるのではないかと思う。旅の説明としては不十分であるので先人松尾芭蕉の奥の細道の名文を訪ねることとする。より良い理解の為に、原文、現代語訳、英訳(ドナルド・キーン)を対比してみた。

松尾芭蕉奥の細道	
原文 「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。」	現代語訳 月日は、過去から未来へ代にもわたるほどの旅人であり、行く年来る年もまた同じような旅人である。舟の上に身を浮かべて一生を過ごし、馬をひきながら老いていく者は、日々が旅であって、旅を自らのすみかとしている。
ドナルドキーンの英訳 The months and days are the travellers of eternity. The years that come and go are also voyagers. Those who float away their lives on ships or who grow old leading horses are forever journeying, and their homes are wherever their travels take them.	

* 愛知学院大学総合政策学部元教授

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。――日々旅にして旅を栖(すみか)とす」という芭蕉の表現は筆者の実体験に照らして共感するものがある。私は学業を終え社会人となって以降、企業従業員として、引き続き大学の教員として、併せて50年間働き続けてきた。その間に50ヶ国訪問、世界遺産60箇所を訪ねる等実際に旅行に出る機会が多かった。

- 1 仕事や、個人旅行で国内都道府県を全て出掛けた。
- 2 仕事が殆どであるが、世界50以上の国に旅する機会があった。
- 3 世界遺産の訪問の旅：ユネスコ世界遺産登録リストと自分の出向いた先を突き合わせてみたところ全部で60箇所に出掛けている。「世界遺産漫遊の旅」として出掛けたのは名古屋時代に数回あるが、それ以外は業務出張の合間に出掛けたものであった。

企業人・大学教員として組織に属する以上業務に精励することは当然であり、旅として世界遺産を訪ね歩いたのではないことは当然である。結果として50ヶ国、60箇所となっていたのであり、振り返って自分で思ったよりも多かった。ただ数の多寡ではなく、自ら求めて或いは導かれて自然体で旅をして来た。芭蕉の含蓄深い文章に惹かれると共に、ドナルドキーン氏が芭蕉の旅紀行に深い理解をした訳文の表現に感銘を受ける。

2) 海外経験

海外訪問国 50ヶ国以上

中東5(サウジアラビア・イラク・カタール・クウェート・ヨルダン) アフリカ2(エジプト・ナイジェリア) 北米 欧州・アジア 各20ヶ国以上

訪問国世界遺産60ヶ所へ

旅行の記録と世界遺産国別一覧表とを突き合わせて拾い出したものである。

日本16 中国10 イタリア7 スペイン3 フランス4 ドイツ2 ベトナム3 15ヶ国1

日本の世界遺産一部を除いて全部出掛けている16箇所

旅が好きで、仕事の合間に訪問地で歴史遺産、文化遺産の訪ね歩きを仕事の合間に行ってきた。当初から目標目的があって、このような結果になったのではなく結果としてそうなった。歴史好きと出掛け好きではあるし、健康を保っており、楽天的で、好奇心の強い気質である。乗り物に乗り遠地に向かう際は、新しい場面で楽しい発見があるかも知れないという期待感を持つ。私の相手には旅行線が両手とも現れている。理由は判らないが「旅をする人」に生まれ付いた様だ。仕事の合間を見付けて、仕事のなかで遊びと楽しみを見出すことを求めて実際そうやってきた。ひたすら使命感をもって仕事を続けて来たと同時に、その合間を縫って旅を楽しんできた。双方の意味で納得がある。

旅には様々の発見がある

東洋と西洋の接合点イスタンブール



図表1-1 ボルボラス海峡に架かる「東洋と西洋の架け橋」トルコ・イスタンブール

「イスタンブールは奈良を終点とするシルクロードの出発点」であることは知識としては知っていたが、橋の西は西洋、橋の東は東洋というその場にいることに感激した。滞在ホテルを引き払って橋の袂のホテルに宿泊して架け橋を眺めながらその実感を味わった。この橋を利用する車両が多く、渋滞が激しいのでその緩和の為に海底に

トンネルを掘り日本の技術・資金の協力で道路を設定する計画が進んでいるという。

3) ライフワーク環境との出会いのきっかけ

高校まで九州で過ごし、進学先は日本の古都京都であると迷うことなく一人決めた。千年の歴史の京都で日本のこと（＝古都）を学ぶのが自分の定めだと決め打ちした。進路を決める際に京都大学工学部化学系学科を志望したが、2浪後専攻を文系に変更し経済学部に入學した。変更した理由は実験と設計という技術分野に従事する者の基本的な素養の習得に自信が持てないという、基本的な壁におち当たった。しかし、化学工業分野の業務に付きたいという希望は持ち続けた。就職先は石油化学プラント・メーカー（化学工場の設計・建設業）の三菱系の千代田化工建設（株）を選んだ。入社数年後義兄が教授をしていた横浜国立大学の応用化学科Ⅱ部（夜間）に学士入學し、卒業することが出来た。

動機は聴講生として自己研修を行う積りであったが、義兄の強い薦めによって学士入學した。入學時は社業の兼ね合いで学業を継続出来るとは思えなかったが、幸いにも会社、指導教官、学友、家族の理解と支援を受けることによって卒業できた。幸運に恵まれたことに感謝の念で一杯である。卒業後40年以上経っているが、その想いには変わりなく、何らかの謝意を表し続けていきたい。

4) 企業在職中は多種多様の仕事をやる機会に恵まれたライフワークの環境に行き付くまでの様々の旅を経験

社業では営業、調達、プロジェクト管理、人事、海外勤務などを経てライフワークの環境に行き付いた。営業、経理等とその道一筋ではなく、新規開拓・企画業務部門を歩いてきた。例えば購買部門には2回計6年間勤務したが、業者との折衝窓口立つことはなく、工所用資材購入、工事・労務調達、海外調達を含めて調達本部の調達方針、業界調査、購入価格方針立案等の広範囲にわたる

調査企画・本部長補佐等を担当した。環境部門に行き着いたのは50歳台である。私の持ち分となったISO環境マネジメントは、和訳すれば環境経営であり、社業での多部門・多業務経験を環境経営に生かすことが出来た。

5) 環境との出会い

地球環境時代の幕開けの到来

環境部門に着任する直前の1980年代は世界の地球環境時代の幕開けの到来の時期であった。社業で地球環境課題を纏めると共に、日本産業界全体の環境新時代への課題を拓く役割を担う立場になった。産業界共通の課題を通産省・経団連主導で行う地球環境対策チーム参加という新しい旅のはじまりとなった。携わった業務の概略を述べる。

経団連は鉄鋼、自動車、電機等の重厚長大産業のトップが役員を占める強力なリーダーシップを発揮するNPOであり、エンジニアリング産業は、公害を排出しない装置・プラント設計建設を受け持つ小規模の環境に重点を置く国際派企業であると評価されていた。環境重視・国際派という要素が決め手で、経団連地球環境室メンバーとなり、会社の環境企画室長という立場で、参加することになった。

経団連地球環境室課題Ⅰ—経団連地球環境憲章

地球環境時代の到来に向けて日本が世界に向けて発信する、産業界の行動規範である経団連地球環境憲章制定の為環境保全に最も熱心な15企業代表により編成され、短期間に完成した。

1991年 西嶋参加

経団連地球環境室課題Ⅱ（WICEM-II 第2回世界産業界環境管理会議）

国際商工会議所（ICC）主催でロッテルダムで開催された。1991年「持続性のある開発のための産業界憲章」を決定し、環境マネジメントを国際的な場で作成する提案をリオサミットに提起することを決定した。西嶋参加

経団連地球環境室課題Ⅲ—UNCED 国連環境開

発会議・リオサミット

ブルントラント委員会が提案した「持続性のある開発 (Sustainable Development)」の理念を全世界で合意し、実行に移すこと」ブラジル・リオデジャネイロサミットネイロで合意した。

経団連地球環境室課題Ⅳ—ISOTC207 環境マネジメント 西嶋参加

リオサミットで決定され産業界が受け持つ環境マネジメントの国際規格化業務 西嶋がISO14001作成の分科会に参加した。ISOTC207については、別章を起し詳述する。

6) 環境経済を自らの分野と見定めた。

1990年環境企画室が発足し室長職に任じられたので、自らの方向付けを行った

- 1 経済+化学⇒化学経済 「経済と化学」双方の特性を合体させて未確立の化学経済分野を、自分の領域として確立する。化学経済分野のうち与えられた環境を取り込み「環境経済」に絞り込む。
- 2 業界で認知されている「化学経済」誌に環境経済論文を連続3回投稿した。更にそれを基に処女作の自著を纏め上げた。広すぎる化学経済分野のうち環境経済分野は石油・化学業界にとって「責任ある対応 (Responsible Care)」を科せられる課題である。社業としては顧客の巨額の環境保全装置の建設を請負うプラントメーカーの立場で、その投資効果や経済性は常に問われ、プラントメーカーの立場を明快に示す必要があった。
- 3 1997年に大学に転籍以降は環境経済を「環境経済、環境経営、環境監査」に分け講義を行うと共に研究活動を展開し論文・著作執筆に専心した。

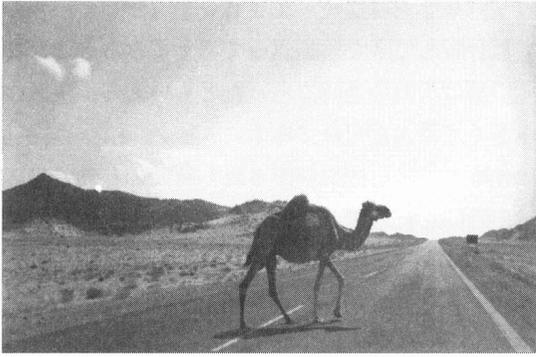
第2章 リスクを避け異文化交流を楽しむ —カルチャーショック連続の人生—

1) 異文化との出会いとカルチャーショックの連続

1997年 (平成7年) 永年住み慣れた横浜を離れ名古屋に14年間住んだ。名古屋で良かったことは、勤務する大学での若者との出会い、それに味噌煮込みうどん、ひつまぶしに代表される食文化、三英傑を生んだ美濃・尾張・三河文化との出会いがあったことである。東京・大阪と全く異なる「ケチ」といわれる金銭感覚もユニークであるが、合理的であると受け止めることが出来た。それに世界に誇る産業文化が芽生え育っている。住んでみてはじめて異文化に触れることを実感出来た。

横浜は開港時代の雰囲気を残す文化を味わうことは出来るが、宅地造成に開発されたマンション群が拡大するにつれ地元文化色は薄まっている。

名古屋に赴任する以前は東京・横浜で35年余過ごした。その間短期赴任滞在 (国内、海外) があり、50ヶ国を超える海外へ出掛ける機会があった。これら訪れた夫々の国・場所で異なる文化に触れてきた。傘壽に至るまで生きてきた人生行路を辿れば、異文化との出会い・交流があり、様々なカルチャーショックを乗り越えてきた実感がある。ショックは大きかったがそれによる躁鬱症、或は不適合症になり、逃げだしたくなることはなかった。異文化とは異国の文化のみを意味するのではなく、国内地域間 (東京・横浜と東海・名古屋等) の違い、企業文化と大学文化の違い、宗教の違い (キリスト文化、イスラム文化、仏教文化) 等の広義の異文化である。



図表2-1 サウジアラビアのハイウェイを悠々と横切る駱駝

2) 企業文化におけるカルチャーショック

大学卒業後の就職先は、世界中で工場造りを行う多国籍ゼネコンであった。その企業文化ではイスラム文化を含む世界数十ヶ国とビジネスの相手方である企業との、異国文化に触れ、その地で生きていくため当地の文化に適應することが迫られた。相手の文化に合わせる事が出来てはじめて仕事の相手として受け入れられる。合わせるに至る間は様々なカルチャーショックの連続といえる。この企業の従業員になった以上、それらに耐えて切り抜けていかねばならない宿命にあった。それは同時に、自らが現在享受している日本の文化は何であるかの間に答え、相手方に理解して貰うことでもあった。日本とは何か、日本人は何を考えていることが常に問われる仕事と生活の場を通じて所謂異文化交流を、自ら進んで行くことが必要であり、求められもした。30年以上も異文化交流の経験の積み重ね、カルチャーショック克服と異文化への適應性は身に付いていったといえる。

3) 異文化交流によるカルチャーショックのハイライト

カルチャーショックのハイライトは40歳代でアラビア赴任時であった。数百億円の石油化学工場の新規建設の技術移転を伴う契約業務遂行の現地責任者としての赴任であった。日本人、アメリカ人、アラビア人が、夫々仏教、キリスト教、イス

ラム教の文化の背景のもとに建設工事を実施する実践異文化交流であった。文化交流ではあるが、実際は文化相克のドラマがあった。施・施主・経営者はアラビア人、アメリカ人は経営指導・コンサルタント、日本人は元請・工事遂行責任者であった。異文化交流という優しい表現は該当しない異文化間の闘いの様相であったと言えるだろう。仏教文化のもとに共生・調和と協調が日本の文化の特徴であり、仏教徒である自分はキリスト教アメリカ人、イスラム教徒アラビア人とそれなりに付き合った。しかしイスラム教徒とキリスト教徒はお互いに全く相容れない価値観がある様だ。主張の強い3者の三角関係にあっては、相互に納得し合意に至るまでは文化と文化の衝突・相克があった。今になれば楽しい思い出であるが、壮絶な闘いの場にいた気がする。仕事の中身も厳しさの連続であったが、異文化交流という優しい表現は該当しない異文化間の闘いの様相であった。



図表2-2 顧客のサウジアラビア基礎産業公社(SABIC)のプラント

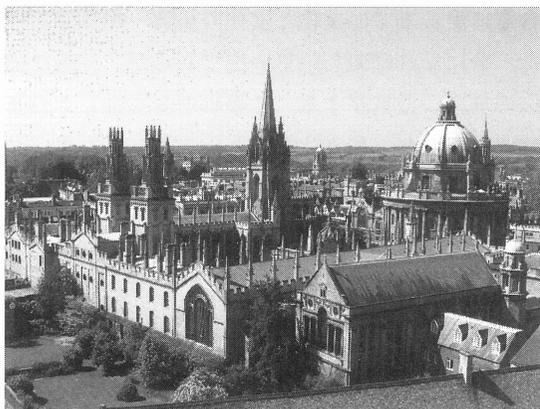
同時多発テロがニューヨークで発生した折、驚きであったがアラビアで経験したイスラム教徒とキリスト教徒の相克が他の複雑な要素と結び付き不幸な結末を生んだものと理解した。これは文化・文明の衝突だと。

4) 企業文化と大学文化の違い

企業文化と大学文化の違いは、相当大きく実際にショックであった。茶髪の若者との付き合いには直ぐ慣れたが、企業経験を経て研究・教育に携

わるも場合と、研究・教育一筋に進んだ教員との意識のギャップは当然であるが、大学経営層、大学事務当局、地域社会との折衝等は企業在動中に身に付いた異文化交流で適応し対応が可能であった。

企業では国際競争が激越な競争に晒されている。大学でもその激越さは同じであるが、それを実感出来て、対応する備えが充分ではなかった様に思える。教育は国家百年の計であり、世界的視野と歴史観を有し、指導者としての使命感を有するリーダーが求められているがそれに応える対応が充分とは思えなかった。出来ているとは思えなかった。



図表2-3 オックスフォード大学キャンパス

5) 歴史好きが異文化交流に有効に作用

私は好奇心旺盛で、楽観的、くよくよせず落ち込むことが少ない生れ付きのように思う。私は理系志望の学生であり同時に歴史好きであった。15、16歳で授業に歴史の授業が入ってくると教科書や市販の時代年表では飽き足らず、1メートル程の長さの巻紙を拡げて手造りの年代表を納得しながら自分で作成していた記憶がある。

6) 異文化交流の海外旅行にはリスク一杯

「世界遺産・異文化交流行脚」が私の主題である。格好良くて憧れであるが、格好良いだけでは済まないが世の常である。夫々の旅には都度厳しい現実があり、多くのリスク・危機が一杯である。そ

のリスクを避けながら生き延びて(サバイバルして)行脚してきた。振返って考えてみるとこれまでの旅は失敗の連続であったともいえる。失敗が小さくて済んだだけである。

仕事の旅は出張で制限された時間の範囲で世界遺産訪問を行ってきた。海外の観光個人旅行の場合はバックツアーを使わず、単独か極く限られた人数で行って来た。グループツアーも長年のうちには1、2あったあるが、極めて少なかった。

バックツアーは盛り沢山で案内が付くので楽しみは大きい。行動は制限される。個人旅行の場合は希望の場所へ楽しい旅をする分だけ、リスクは自分で負う。旅行代理店で仕立てるバックツアーのリスクの多くは代理店が持ち、その分代金を支払う。海外ではポイントを絞って特に詳しく見たいところ限定し現地ガイドを依頼する。英語のガイドが殆ど。

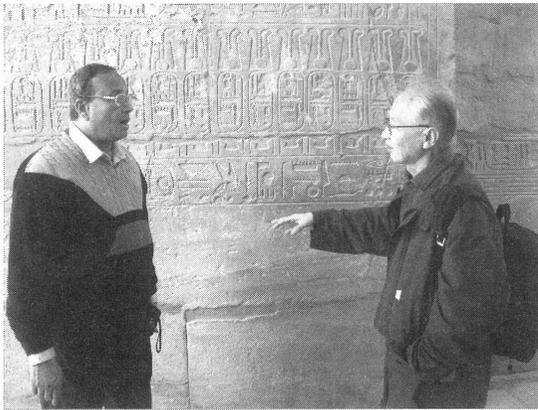
リスクの大きさ

リスクの大きい順に並べれば 1 いのちを落とさない 2 旅行先での天変地変を避ける 3 病気怪我に気を付ける 4 金銭・パスポートを盗られない・スリに遭わない。

現実には北欧のホテルで財布を盗まれているし、パリの地下鉄でスリにあい財布を抜かれた。当方の不注意として諦めるしかない。

7) 現地で観光案内のガイドを探す

友人が誘われてエジプトに1週間の個人旅行を行った。最初にエジプトレクソールでエジプトNO2ガイドに巡り合えた。2日間案内して呉れたガイドは4か国語をこなし、エジプト南部を管轄するという有能なガイドであった。他方ミャンマーでは滞在5日間通して一人のガイドに案内を依頼した。



図表2-4 エジプトNO2ガイドが案内して呉れた
レクソールで

世界のトイレ学に詳しく本も書いている友人から、トルコの開放トイレは有名だということを聞いていた。実際にローマ遺跡のなかにあり興味深く眺めることができた。



図表2-5 トルコの開放トイレ・連れウンチ・

トルコ・エフェソスで一日のみの多国籍編成のツアー仲間



図2-6 米国・パキスタン・韓国・中国・日本9名の
ツアー

8) 海外で医者に掛る場合

海外で医者に掛ることは数回経験している。インドネシアで打撲治療の為医者にかかった時は、日常的には使わないキャブラリーがすらすらと出てくるから不思議であった。緊急時には脳のなかに保存され眠っている記憶語彙が、動員されて然るべき対応があるようだ。アラビア駐在の折、青魚の食中毒でダウンし、回復に2-3週間掛った。

9) 忘れ物と時差ぼけの対策 テニスが有効

時差ボケ 地球一周の旅をすると強烈な時差ボケに襲われる。逆回り日本⇒欧州⇒米国⇒日本と偏西風回り日本⇒米国⇒欧州⇒日本の旅を数回経験している。訪問先は10箇所、計2週間程度であった。南北移動は時差が無いため気温差に対応すれば良いが、時差と温度差を身体で受け止めて、その場で慣らしていくことは至難の業であり出来ない。その様な無理な旅は避けた方が無難である。それらの場合の時差ボケ解消には筆者にはテニスが有効であった。成田からニューヨークに着くと直ちに替えてテニスクラブに直行し、約1時間汗を流す。すると浮いた感じの身体が着地する。ホテルの部屋に戻り固い筋肉をほぐして、人心地に戻る。パリの名門クラブ・全仏オープン開催のローランギャロス・テニスクラブでも、アメリカのシカゴ他、アジア各都市等世界の各地でテニスを行った。ウェアだけ持参であとは借り物で済む。

以上

参照文献

- 1 芭蕉 日本人のこころの言葉 田中善信緒 創元社 2013年6月10日
- 2 ドナルド・キーン 松尾芭蕉の奥の細道の名英訳者 Wikipedia Ja.wikipedia.org/wiki/ドナルド・キーン
- 3 古賀正憲著 「便所の中で」 徳間コミュニケーションズ 昭和63年4月21日
- 4 千代田化工建設(株) www.chiyoda-corp.com/- キャッシュ 神奈川県横浜市。世界に展開する昭和23年創業総合プラントエンジニアリング産業。建設及びエンジニアリング企業。

- 5 SABIC (サウジアラコミュニケーションズピア基礎化学工業)・中東最大の企業でサウジアラビアの基礎工業化推進企業。
- 6 月刊「化学経済」 1954年創刊, 化学工業界で唯一の専門誌。国内外から高い支持を得, 化学業界 トップをはじめ, 多彩な執筆陣により, 化学および関連産業の支持を得ている, www.chemicaldaily.co.jp/monthly/index.html

- html - キャッシュ
- 7 西嶋洋一著「地球環境をリエンジニアリングする」成文堂, 2001年6月20日
- 8 ユネスコ世界遺産検定公式ガイド300 世界遺産検定事務局 NPO世界遺産アカデミー 2012年9月25日

以上

Abstract: Life seems a chapter of voyages through life as Matsuo Bashou stated in Okuno Hosomichi

- 1) Struggle for Existence for life-long health care.
- 2) Bussiness Career toward Environmental Management representative of Chiyoda Corporation starting from the divisions of marketing, procurement, project coordination, and Saudi Arabia field construction Project Manager and so on
- 3) Travel to more than 50 countries:for bussiness and 60 UNESCO world heritage property sites
- 4) Academy Career:professor of Aichi Gakuin University for Environmental Management and related literary Work

keywords: Voyage for 50years toward Lifework Environmental Management